

平成30年はクルマエビが豊漁でした

漁業生産研究所 海洋資源グループ

県の魚であるクルマエビは産地価格が 5,000 円/kg 程度をつける高級魚で、クルマエビがたくさん獲れると産地市場も活気づきます。このクルマエビが、「今年が多いよ」との明るい声が平成30年夏以降市場でよく聞かれました。そこでこれまでに入手できている市場のデータを調べたところ、豊漁の状況がわかってきましたので、紹介します。

図1は小型底びき網漁船の豊浜漁港(伊勢湾操業船のみ)、幡豆漁港(伊勢湾・三河湾・渥美外海操業船の合計)におけるクルマエビ漁獲量の推移です。平成30年の豊浜は3.9トンで豊漁期に比べると少ないものの平成10年以降では最も高い漁獲量となっています。幡豆は12.5トンと3年ぶりに10トンを超えており、図には示していませんが渥美外海での漁獲量の伸びが目立っています。

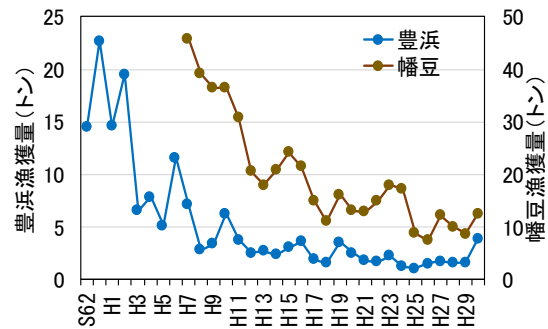


図1 豊浜、幡豆漁港の小型底びき網漁船のクルマエビ漁獲量の推移

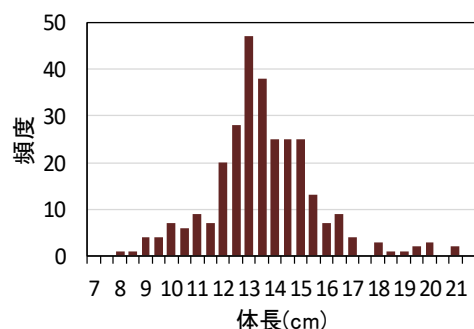


図2 伊勢湾のクルマエビ漁獲物の体長組成 (平成30年7~11月に測定)

伊勢湾の漁獲物の7~11月の体長組成(図2)を見ると、モードは比較的大きい13cmにありました。また、この時期、渥美外海には当年生まれのエビはいないことから、平成30年に伊勢湾・渥美外海で漁獲されたものはいずれも平成29年の秋生まれと推定されます。これは、平成29年秋季の産卵量が多かったか、平成30年春季の伊勢湾が稚エビの生き残りや成長に有利な環境であったかのいずれか、あるいは両方によると考えています。今後はこれらの要因を明らかにしていきたいと思ひます。



図3 鬼崎漁港に水揚げされたクルマエビ (平成30年7月12日)

豊川におけるアユ流下仔魚調査の結果

内水面漁業研究所 冷水魚養殖グループ

愛知県の主要河川の一つである豊川には、仔魚期を三河湾や伊勢湾で生育したアユが春から初夏にかけて遡上します。遡上したアユは上中流域で成長し、秋になると、中下流域の瀬で産卵をします。そしてふ化した仔魚は流れに乗って海に下るため、「流下仔魚」と呼ばれます。当グループでは、アユの資源状況を調べるため、平成20年から豊川下流域で流下仔魚調査を行っています。国交省中部地方整備局豊橋河川事務所の調査結果と合わせた平成30年度の流下仔魚総数は約3.9億尾と推定され、例年の8割程度とやや低水準であるものの、昨年・一昨年に比べ多くなりました(図4)。豊川の流下仔魚は矢作川と同等に三河湾に流下するアユ資源にとって大きな役割を持っていることから、今後も豊川での産卵が順調に行われ、三河湾に流下するアユ資源に変動がないかを調査していきます。

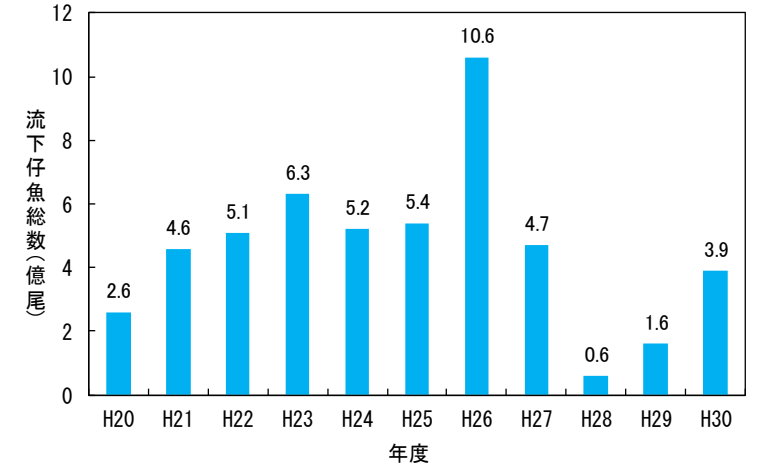


図4 流下仔魚総数の経年変化

トリガイ稚貝調査を行いました

トリガイは愛知県の重要な漁獲対象種の一つで、その漁獲量は大きく変動します。当グループでは、資源形成機構を明らかにして、本種の漁獲量の安定化を図るため、秋から三河湾で稚貝の分布調査をしています。豊漁であった昨年は、1月に西側から東側にかけて広く分布し、特に一色沖では1000個体/1000m²と高い密度でしたが、今年の1月の調査では、稚貝の密度は全体的に10個体/1000m²程度と低い状況でした(図5)。昨年の三河湾の貧酸素水塊の面積は平年を下回っており(水試ニュース508号)、トリガイ漁場の底層環境は良かったと考えられますが、今年のトリガイ稚貝は少ないことから、トリガイの資源変動には、貧酸素水塊の規模だけでなく、貧酸素水塊の発生や消長のタイミングなど、別の要因が影響している可能性が考えられました。今後は調査や詳しい解析を継続していきます。

漁業生産研究所 栽培漁業グループ

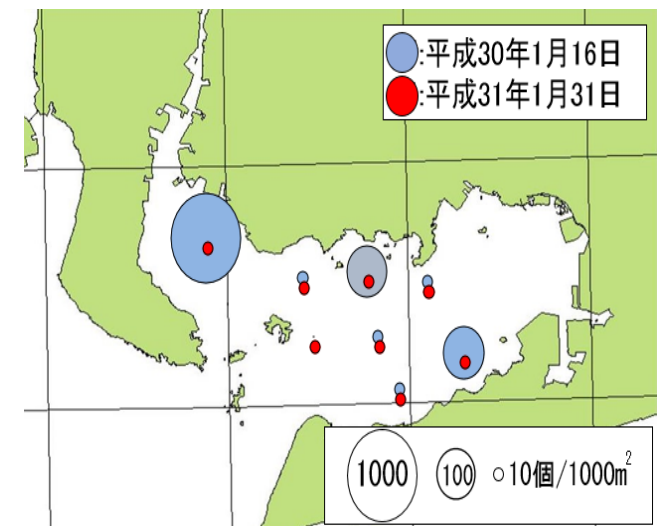


図5 トリガイの分布密度

